

第4回 ラッピングで知った 人から人へ幸せを運ぶ喜び

陶芸、楽器、生け花……20代の頃はいろいろなことに手を染めたものの
どれも長続きしなかったという内田さん。

その後、子育ても一段落し、「自分を表現する何か」を探していた時、
クリスマスイブの日にデパートで見たラッピングのディスプレイに
心が震えたことを思い出したのが、そもそもの始まりでした。

クリスマスツリーのラッピングを
手がける内田さん。白とブルーを
基調に大人のクリスマスを演出。

取材／井田ゆき子 撮影／三好 恵



材料はペーパーとリボン。四角い箱を包む内田三紗子さんの流麗な手さばきは、まるで手品を見ているかのよう。何の変哲もない箱がみるみるうちに華やかな衣装をまとい、贈り主の気持ちを包み込んだ素敵なプレゼントに変身していきます。

「ラッピングに包めないものはない」という内田さん。これまでにさまざまなラッピングに挑戦してきました。プロポーズの意を込め、恋人に贈りたいという男性の依頼で、婚姻届を包んだり、装飾コンテストに参加するダンブカーの女性運転手のために、走るとリボンが風になびくように、

ラッピングは、贈り物の脇役にすぎないのかもしれない。でも、友人へ、家族へ、恋人へ……

幸せの瞬間の橋渡しをする喜びをとおして、ようやく自分も社会の表舞台に立てたような気がするんです。

内田三紗子さん(51歳／北海道)

車を包んだことも……。

なかでも傑作は花嫁のラッピング。シンプルな純白のドレスに身を包んだ花嫁をリボンで華やかにデコレート。披露宴のお色直しのパフォーマ

ンスとしても好評を博しました。

5年前には、人気テレビ番組『TVチャンピオン』のラッピング王選手権で優勝。日本一のラッピング女王として知られるようになりました。



どんなふうにも包めば、喜んでもらえるか、驚いてもらえるか。それを考えるのが何よりの楽しみ。



(右)新春らしい華やぎを和風のラッピングで演出。
(左)クリスマスプレゼントにツリーのラッピング。



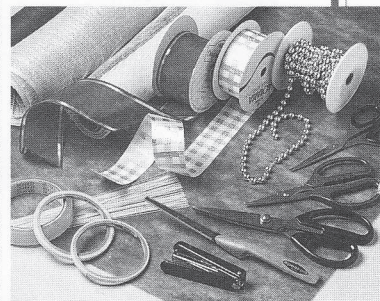
ラッピングアートの壁掛け。リボンとペーパーでクリスマスツリーをイメージ。

物を包んでリボンをかけるだけがラッピングではありません。カーテンで部屋を包む空間づくりや結婚式で花嫁を包む人生の門出の演出まで、人の心を包み、気持ちを伝える——提案できることは無限にあるんです。

東京でのOL時代、自分を表現できる“何か”を求めて、ピアノ、歌、陶芸、生け花といういろいろなものに挑戦しました。が、これだと思えるものにめぐり合えぬまま、25歳で結婚し、出産した内田さん。家事と育児に専念し、時間に追われていたうちに、いつの間にか40歳を迎えていました。ラッピングの勉強を始めたのはちょうどその頃。子育てが一段落し、もう一度自分のために何かをしたいと思ったものの、何もないことに気づきます。それまで歩んできた自分の半生を振り返った時、ふと思ひ浮かんだのが、結婚前のクリスマスマスィブに、ラッピングでデコレーションされたウインドウディスプレイを見て、心が震えるほど感動したこと。以来、「ラッピングを勉強してみようかな」という思いが、少しずつふくらんでいったのです。

自費で講師を東京から札幌に招いた熱意

当時、札幌にはラッピングを勉強できるところがありませんでした。それでもあきらめなかったパワーと情熱が内田さんの真骨頂。友人が紹介してくれた東京で活躍するラッピングコーディネーターの五味菜里さんが、月に一度、個人指導に来てもらうことにしたのです。



ラッピングで使う道具。ピンキングばさみ、カッター、ワイヤー、ホチキスなど。ペーパーやリボンは素材や柄もいろいろ。

「下の子がまだ小学生で家を空けたくなかったから……」

札幌まで来てもらう旅費と授業料などの費用は、ご主人の歯科医院を手伝って得た報酬を少しずつ貯金していたので、それをあててすることに。ラッピングは、基本技術を覚えたらあとは自分の感性しだい。自分の

なかでイメージをふくらませて作り上げていく作業です。

個人指導を受けるようになって2年半、内田さんのラッピングテクニクは「もう教えることはないから、あとは自分でやらない」と、先生に言われるまでに上達しました。その後、ラッピングを仕事にした



園芸が趣味だったが、仕事を始めてからは手間のかからないブドウ栽培を自宅で楽しむ。

内田さんのこれまでの道のり

北九州で生まれ、東京でのOL生活を経て結婚。歯科医のご主人と一緒に札幌へ。

平成2年、子育てが一段落したのを機にラッピングコーディネーター五味菜里先生に師事。

平成5年、北海道で初めてのラッピング・スクール「フレッシュ・レスパス」を開校する。

デザイン専門学校でディスプレイデザインやカラーコーディネートを学ぶ。ラッピング素材や雑貨のお店「タリエラージュ」を開店。

平成7年、テレビ東京「TVチャンピオン」第2回ラッピング王選手権で優勝。

ラッピング指導のほかにも、イベントや商業空間でのディスプレイ、ブライダルプロデュースなど、活躍の場を広げている。



「TVチャンピオン ラッピング王選手権」に出場。4ラウンドを勝ち抜いて、見事グランプリに輝いた。



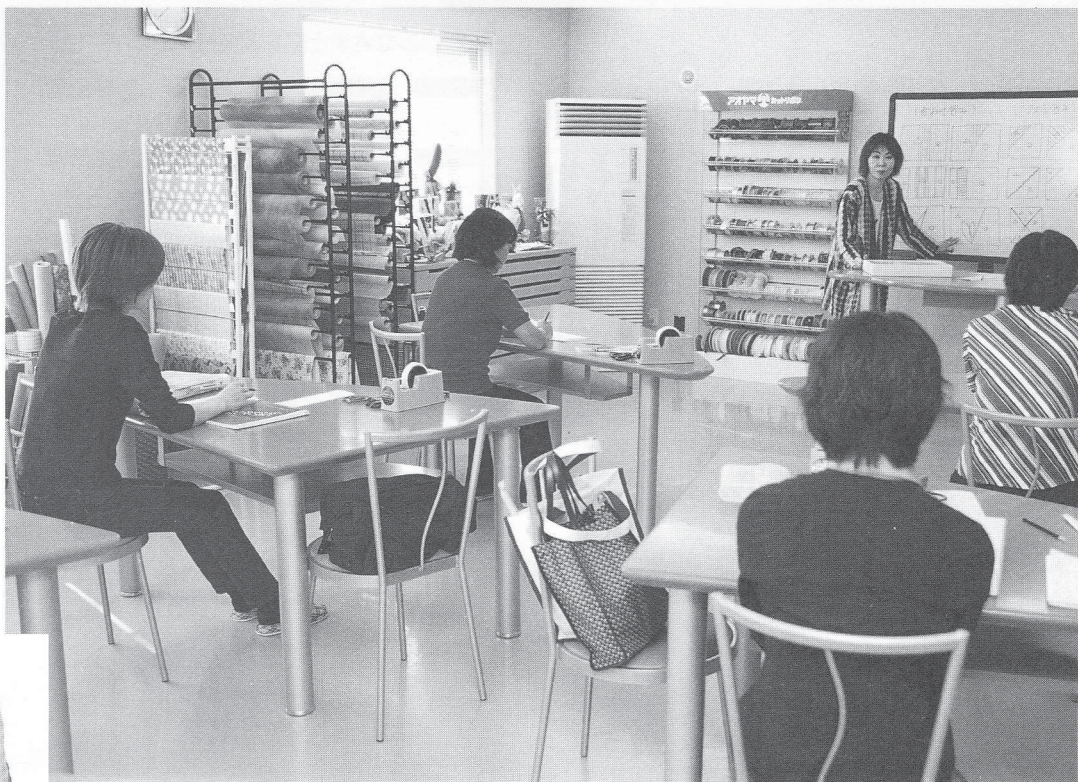
内田さんのあ　　日

- 7:00 起床　ご主人と一緒に朝食。
- 8:00 家事　掃除、洗濯など。
- 10:00 出勤　午前中の教室の講師を務めたり、店の雑用など。
- 12:00 昼食　家に帰り、ひとりで昼食。
- 13:30 出勤　午後の教室の講師を務めたり、デパートや結婚式場へ商談に出かけたり。
- 16:00 家事　一度、家に戻って買い物や夕食の支度。夕食は午後6時頃に。
- 19:00 出勤　夜の教室で講師を務める。
- 22:00 経理　教室と店の帳簿をつけたり、伝票の作成は一日の最後に。
- 23:30 就寝　唯一の健康法は7時間の睡眠。遅くとも12時には床に就く。

ラッピングスクール「プレジェ・レスパス」では主婦やOLら150人が学ぶ。基本からラッピングコーディネーターの資格取得コースまで5つのコースがある。



ラッピングの最大のポイントは、素材、色、デザインの3要素をいかにバランスよくコーディネートするかということ。友人へ、家族へ、恋人へ、依頼主の思いをどう表現し、贈り手に伝えられるかが



北海道初のラッピングスクールを開校

美容院など、あちこちに売り込みに歩くように。もちろん、すぐにビジネスに結びつくほど甘くはありません。あらためて現実の厳しさを思い知らされます。

「いつそのこと、自分でラッピングの学校を開いたら？」——ふとひらめいた考えが、内田さんのやる気に再び火をつけました。が、ご主人をはじめ周囲は「生徒が集まるわけがない」と大反対。北海道ではラッピングといっても、「箱の包み方を習ってどうするの？」といった認識がまだまだ一般的だったからです。

「でも、だからこそスクールが必要だと思っただけです。人に教えることはラッピングの普及の第一歩。それに、道内初のラッピングスクールの創立者」というほうが、あとあと受け入れられやすいじゃないですか」

平成5年、内田さんは周囲を説得して、自宅の敷地内に北海道初のラッピングスクール「プレジェ・レスパス」を開校。次いで、翌年にはラッピング素材と雑貨の店「ラタリエ・プレジェ」をオープンしました。

醍醐味です。内田さんはスクール経営や教室講師の忙しい合間をぬって、デザイン学校でカラーコーディネートやディスプレイデザインの勉強にも取り組みました。

ラッピングは、単に物を包むだけではありません。ラッピングを使得ての空間演出やラッピングを暮らしに生かす提案は、さまざま。たとえば、掛け方ひとつで雰囲気が変わるテーブルクロスやカーテンも、部屋のラッピング」といえるそうです。

最近、よく頼まれるのが、結婚式をラッピングでプロデュースすること。両親へ渡す花束や引き出物を包み、会場全体を包み、花嫁を包んで人生の門出を演出したり……。ほかにも提案できることはたくさんあるはずとアイデアは尽きません。

お葬式で別れの儀式を演出してみたい

今、内田さんが考えているのは、お葬式のラッピング。例えば、ペットの棺を愛情あふれるラッピングで飾れたら、心を込めたラッピングでやすらかに送ってあげられたら……。ラッピングはハートを包むこと。と、きっぱりと言いきる内田さん。その指先から、ラッピングの世界が大きく広がっていくようです。



音楽が大好き。仕事の合間の息抜きに、よく聴くのはベートーベン。

ラッピング素材と雑貨の店「ラタリエ・プレジェ」は学校から5分の距離。ラッピングのことなら何でも相談に応じている。
☎011-852-2210

おしゃれで簡単なラッピングワンポイントレッスン

まるでキャンディが入っているような可愛いラッピング。細長いボトルや円筒形のものなどを包むのにおすすめ。まずペーパーカプを用意。包むものに合わせて両サイドをキャンディのようにまとめ、リボンで結ぶ。布や紙の両端はピンキングばさみできれいにカットしても。

ティーカップに最適なラッピング。不織布の中央にカップを置き、タックをとりながらカップを包む。もう1枚の不織布で同様にソーサーを包む。裏返したカップをソーサーに置き、半分に折ったペーパーで包み込むようにリボンで蝶結びに。両端をピンキングばさみでカット。

